



TITLE:

# <批評・紹介>石濱先生古稀記念東洋學論集

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

---

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介>石濱先生古稀記念東洋學論集. 東洋史研究  
1959, 18(1): 100-101

ISSUE DATE:

1959-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148128>

RIGHT:

石濱先生 東洋學論集  
古稀記念

昭和三十三年十一月  
石濱先生古稀記念會發行  
B5判 八四二頁

昨年の十一月、石濱先生の古稀を記念してこの論集が刊行され、關西大學で行われた祝賀式場において先生に贈呈せられた。總頁數八百を超過する大冊であつて、こうした慶祝事業のともすれば停滯しがちな東洋學界においては、近來まれにみる盛事といわねばならない。

十年まえ先生が還暦の壽を迎えられたときにも、記念論文集の刊行がくわだてられ、數十篇の論文が集められたのであるが、敗戦後の慘憺たるわが國の事情においては、とうてい實現の望みもなく、ついに原稿のまま贈呈せられたことであつた。その後二十七年四月から關西大學東西學術研究所論叢のうちに加えて、これらの論文は一篇ずつ刊行され、三十三年六月にいたつて二十九篇の完成をみたのである。今回それらも装釘を新たにし、「石濱先生還暦記念論文集」第一集・第二集となつて同研究所から公けにせられた。その中には、なくなつた羽田先生のほか、武内・青木諸先生のものも含まれている。このことは古稀論集の序文にはふれられていないけれども、一言のべておかねばならない。それとともに、先生の今後ますます壽を重ねられて、こうした論集の出ることな數冊に上るであらうことを、心からこいねがうものである。

この論集の執筆者は五十三人、論文にして五十二篇、さきに還暦

のさいの執筆者は紙面の都合から遠慮する申合はせとなつたので、兩者を合すれば、先生のために論文を呈したものは八十二人に上るわけである。内容は歴史、文學、言語、哲學、宗教等の各般にわたり、まづたく東洋學論集の名にふさわしい。先生の廣い學問と人徳とによつて、わが國の東洋學のすべての部門が、おのずから包容されたかの感がある。

私事にわたるが、わたくしは先生に對して、春風駘蕩たる溫顔とともに、泊園書院というものを通じて、早くから格別のなつかしきを感じたものの一人である。というのは、わたくしの祖父は百年あまりむかし藤澤東暎の數えを受けた泊園の門下であり、南岳とは少年のころからとくに親しかつた。兩師の遺品はなおわが家に少なく、幼少のころから聞かされた泊園に關する逸話は、いまだに忘れないものがある。陸奥宗光が入塾した當時はまだ可憐な少年であつたという話などを聞くにつけ、泊園の人材育成の功に感心したことであつた。先生は十歳のときから南岳の門に入り、令師を通じて姻戚關係を結ばれたためあつて、泊園の學統を守るためにはずいぶん盡力をされた。古い泊園誌をとり出してみると、感慨を新たにすることが少くない。泊園の遺書が先生の幹旋によつて、關西大學圖書館の所藏に歸したのも、まことにその所を得たわけである。

餘談が長くなつたため、限られた紙面ではこの内容の豊富な論集の全貌を紹介し批評することは、とうてい不可能となつた。本誌の性質上いちおう史學に關する論文を分類して、その題目を紹介するに止めなければならぬのを遺憾とする。

まず多いのが臺外史で、内田吟風「丁令柔然史二考」、岡崎精郎「河西ウイグル史に關する一研究」、愛宕松男「部族名キタイ」契

丹語源考」山本守「蒙古包名義攷」のほか、桑田六郎「宋と大食」、佐藤圭四郎「アッバース朝時代のマニ教について」、藤本勝次「カリフ・ムウタシムとトルコ奴隸兵」などアラビア關係のものが目につく。つぎには清朝史關係で、石田幹之助「郎世寧傳放略補遺」、小野川秀美「何啓・胡禮垣の新政論議」、田中克巳「通譯グルフマン」、羽田明「ガルダン傳雜考」、三田村泰助「滿洲シヤマニズムの祭神と祝詞」など五篇に上り、民國に入つては、三上諦聴「中山艦事件の一考察」がある。法制史では、安部健夫「讀元典章札記三則」、内藤乾吉「敦煌發見唐職制戸婚賦律斷簡」、仁井田陞「スタイン敦煌發見の天下姓望氏族譜」、佛教史では、小笠原宣秀「明清淨土教の指向」、塚本善隆「敦煌本シナ佛教々團制規」、野上俊靜「稻葉正就「元の帝師について」、吉岡義豐「歸去來辭と佛教」、史學史なにし書誌學では、今西春秋「六國史の體例」、内藤戊申「斷代史について」、河崎章夫「清史稿の諸版について」、藤枝晃「西夏經」、守屋美都雄「養生月覽について」。そのほか田村實造「明代の九邊鎮」、森鹿三「居延出土の一冊書について」などがあり、日華關係については、小野勝年「入唐僧圓修・堅慧とその血脈圖記」、中村孝志「東京大船主イチチェン攷」、橋川時雄「倭人が鬱草を貰いだしたこと」がある。

(日比野丈夫)

## 近代における中國と日本

北山 康夫 著

昭和三十三年十一月 法律文化社(京都)  
本文二二六頁 年表、參考文獻 一二頁

この本は、表題の示すごとく「近代における中國と日本」、いかえれば日中關係史の叙述を目指したものである。日中關係の正常化への一つの障礙として、それに對する國民の歴史的、理解の欠除を指摘しうるが、これが啓蒙の書として本書の出版は時宜をえたものである。しかし、試みとして新らしいものだけに、概説(『通史』)としての構成の上でも、方法論(『理論』)や表現(『文章』)の上でも、また人物の取扱ひの上でも多くの問題を残しているように思われる。

(1)構成 著者は「日清・日露戰爭以來、日本の政治の中心は常に大陸政策であり、これと中國の民族運動との對立が、アジアの近代史の基調をなしている」と考えられるところから「中國の近代史をできるだけ、日本の歴史とからみ合せて」叙述すること、また國民のアジアに對する無理解は西洋基準の思考法が一般化していることに起因するとも考え、そうした日本の近代化の性格を中國の「内發的な開化」？との對比においてとらえること、この二點を大きな眼目にしているようにみられる。ところで、記述内容から推定するに、この本はおおまかにいつて、①前期(義和團事件ごろまで)——日中兩國の近代化の對比を主題にする、②中期(辛亥革命の後)——日中兩國の連帶主義を強調する、③後期(五四運動いこ)——日本の侵略主義と中國の抵抗運動との對應關係を略述する、といった構成がとられている。つまり、記述上の三本の柱(圖式)が適切に提起されているのであるが、それらが三つの時期に分割されてしまい、それぞれの圖式の歴史的な展開過程と、各時點でのそれらの相互關係が意識的に掘下げられることなく終つてしまつたという感がつよい。

このことは、一つには日中關係史の叙述にあたつて、獨自の時期